恩師の言葉

若手教師パワーアップセミナー「元気が一番」塾主宰
仲　島　正　教

昨年の３月、私の中学校時代の恩師Ｓ先生が定年退職されました。Ｓ先生は私が教師を目指し教育大学に合格した時、自分のことのように喜んで下さいました。そして教師になってからは、年賀状には毎年「教育は足でかせぐもの」という言葉が書き添えられていました。

私はこの３月末で２６年間の教師生活を終えましたが、この間いろいろな子どもたちや保護者と出会いました。なかなかうまくいかず、悩み、立ち往生したこともよくありました。そんな時にいつも思い出したのが、「教育は足でかせぐもの」でした。悩んでいてもしかたがない「とにかく行ってみよう」が私のスタンスでした。もめ事で家庭訪問に行った時「なんや先生か」といって門前払いを食らったこともありました。でも次の日もその次の日も懲りずに行きました。すると「また来たんか、しつこいな。・・・しゃあないな」とやっと戸を開けてもらったこともありました。ただ、このころの私は何か問題が起こってからの「後追い指導」の家庭訪問が中心でした。しかし、これではなかなか問題は解決しないことに気づき、その後の私は、何もない時の「５分間家庭訪問」が中心になっていきました。何気ないことだけどその子の小さな進歩や成長を学校の帰り道に「５分間家庭訪問」で伝えるのです。ほんの５分だけなのです。気になる子どもの家にはよく行きました。ある時、社会のテストをがんばった子どもの家に報告に行ったら、強面のお父さんが迎えてくれ、「先生ありがとう！一杯飲んでくれ」とビールをごちそうになったことがありました。お母さんと１年前に離婚し、父と息子の男二人で暮らしている４年生の子がいました。その息子が作文で「お父さんが好きな自分が好き」と書いたので、その晩それを報告に行ったら、お父さんは玄関先でポロポロと涙を流されました。こんな６年生の子もいました「学校の帰り道、急に雨が降ってきた時、彼は１年生の子に自分の上着をかぶせてやり、自分は走って帰りましたよ」と伝えるとお母さんは本当に嬉しそうな表情になり「先生、あの子、今お父さんの入院費をこっそりとお小遣いから貯めてくれているんです」という話も聞かせてもらいました。「５分間家庭訪問」は、私の大切な宝物となりました。

「教育は足でかせぐもの」・・・・・・これが私の原点です。

（兵庫県人権啓発協会　啓発誌「きずな」2005.年９月号）